

ヤスクニ・レポ 189

国会傍聴16年

—改めて主権者・有権者の責任を考える

代表 西川重則

1

2015年、戦後70年の年を忘れることはあるまいと心に刻む昨今の私である。それは国会傍聴16年という経験を持つ私にとってユニークな出来事が思わぬところから起こってくることと深い関係があり、しかも私の個人的な出来事と言えない重要な事柄であるので、多くの方々に知らせたいと願うようになり、以下報告し、今後の課題にしたい。想像以上に重要かつ今日的な意味を持っているので、読まれた方も知らせることに協力して欲しいと心から願っている。

まず最初に報告したいのは、日本遺族会の新会長に、自民党の参院議員の水落敏栄(みずおち・としえい)氏が選ばれたことであるが、6月8日の記者会見で、国会で審議中の「安全保障関連法案」について、次のように発言している。

「私たち遺族は『我々のような遺族を出しちゃいけない』『二度と戦争をしちゃいけない』という基本理念がある。遺族にも理解できるような政府の説明責任を果たして頂きたい」と語った(「朝日新聞」、2015・6・9、参照)。

安全保障関連法案についてここで詳細に説明することはできないが、要するに私たちの側で「戦争法案」と言っている戦後最悪の悪法であり、マスコミも大きく取りあげている「国会前で路上抗議 安保法制14日は2.5万人集会」と目立つ見出しで報道されている通りである(「朝日新聞」(夕刊)、2015・6・15。参照)。

同じ路上の抗議がカラー写真で「戦争させない」と書かれたプラカードを掲げた座り込みの人々の姿が写されている。

次に報告しておきたいのは、路上の抗議のことの重要な意味であるが、今報告した国会周辺での抗議は15日(月曜日)から24日まで、土曜日、日曜日を

除いて平日に続けて行なうと報道されていることでお分かりと思うが、もともと6月24日は通常国会の場合は閉会の日に当たるが、安倍首相は「戦争法案」と呼ぶ私たちに批判しながら延長国会をしても安全保障関連法案を成立させたいという強い願いを持っており、アメリカとの約束を優先し、野党の反対も、主権者である私たちの反対運動もすべて無視して同法案を何が何でも早く成立させたいとの所期の目的を実現させるために連日のように特別委員会で集中審議を要望し、中谷 元防衛大臣を安全保障法制の担当大臣として起用し、答弁させている。

しかし、私にとって、毎日国会傍聴に開会時刻の午前9時に間に合うように出かけているが、答弁する中谷 元防衛大臣が通常考えられない間違いをくり返すことに驚く私であり、後ろに坐っている若い官僚が予め用意している答弁の内容を書いているペーパーを中谷大臣に手渡すことの多いのにも驚きを禁じえない昨今である。

「戦争法案」でありながら、傍聴券には、「我が国及び国際社会の平和安全法制に関する特別委員会」と印刷されているように、「平和安全法制」という文言を普及宣伝させようとする国家権力の勝手な手法に怒りを覚えつつ、傍聴席から安保国会の「はだかの国会」を正確に知らせる責任を心に抱き、ペンを握りしめ、「特別委員会」の実態を書き続けている。

2

その私の傍聴の一端を見事に「朝日新聞」の記者が、「ウォッチ安保国会 傍聴席から見つめて16年」という見出しで報告して下さったことに私は心から感謝の思いをここに表明しておきたい。短いレポートであるが、未知の女性の記者が、同じ特別委員会の傍聴席から私の一挙手一投足を見ておられ、私に

取材の趣旨を語って下さったのを了解し、驚くべきことだが、翌日の「朝日新聞」の朝刊(2015・6・11、木曜日)に掲載され、私と交わりのある方々から電話を始め文書によって、全体的と言っても過言でない多くの方々から読後感を語られ、心から感謝している次第である。

ともあれ、短いインタビューであったが、「朝日新聞」の女性の記者の見事な見出し、内容の見事な分析、展望についてのレポートに深く感謝したい。なぜ私を知っているのだろうかと思っていたが、何と2009年8月15日の「朝日新聞」の、「ひと」の欄に「国会傍聴欠かさず10年、平和と憲法を見守る西川重則さん」という写真による「ひと」欄で知りましたということのようで、その時の記者は私が所属しているなつかしい私たちと同じ教派の「新浦安教会」の相場郁朗氏による「文と写真」によって、私に対するインタビューとなったということであり、常日頃尊敬している人と人との交流の大切さを改めて教えられた私である。

次に報告したいことは、自民党衆院議員であって、行政改革の担当大臣の経験もある村上誠一郎氏についてである。「東京新聞」(2014・7・14、夕刊、参照)の大きな見出しに、「解釈改憲 自民唯一NO 村上元行革相に激励続々」と書かれている。私についても、「東京新聞」は写真入りで取り上げてくれ

ることがあるが、村上誠一郎自民党議員唯ひとりと言われているが、安倍首相に対する勇気ある発言がくわしく報告されている。記者のインタビューで、次のように発言している。安倍首相に対する率直かつ勇気ある批判であり、清水俊介記者は、「全国から激励のメールやファックスが寄せられ、インターネット上でも村上氏を応援する声があふれる。党内では孤立している村上氏だが、党外の視線は熱い」と述べている。

集団的自衛権の行使を認める閣議決定を行なった安倍政権の解釈改憲に、自民党内から明確に反対している村上誠一郎衆院議員。記者のインタビューに、「こじつけの議論で法治国家とはいえない。国民をなめると大変」と危機感を吐露している。安倍内閣の法案の必要の理由づけに対しても、次のような反対論の理由を述べている。「安全保障環境の変化だの、中国脅威論だの、日本が米国に見捨てられるだの、安倍政権は情緒的な理由を言っているだけ」と。

最後に、私は村上氏が東大受験前の村上少年の家庭教師であったこと、そんな不思議な出会いを忘れず、国会が本来の憲法政治を行なうために、憲法第99条、「国の唯一の立法機関である」こと(第41条)、日本国憲法を確定した者は私たち主権者であること(「前文」)を確信して努力したいことを述べて終わりたい(2015・6・16)。

## 2015年5月15日例会奨励 ハバクク書1章1～4節「預言者の叫び」

### 山川 暁牧師(単立鶴川キリスト教会信徒伝道師)

預言者とは神のことばを民に取り次ぐ働きをする者であると言われていました。だが今夕与えられたテキストでは預言者ハバククは神に向かって叫んでいます。ハバククは神に向かって叫ばざるを得ない状況におかれていたのです。それはユダ王国がカルデア人、つまりバビロンからの攻撃にさらされていたからです。

ハバククは叫びます。「なぜ、あなたは私にわざわいを見せ、労苦を眺めておられるのですか」、と。さらに叫びます。「律法は眠り、さばきはいつまでも行われません。悪者が正しい人を取り囲み、さばきが曲げて行われています」、と。

ハバククの叫びから教えられることは、21世紀の現在を生きる私達キリスト者が神に向かって叫ぶ

ことです。敗戦から70年目を迎えました。しかし、敗戦から70年目の状態は私達が喜べるものであるでしょうか。私たちキリスト者は、神に向かって、この国で起こっている現実を目を向けてくださいと、叫ぶ必要があるのではないのでしょうか。現実には神の目には喜ばしいものとは映っていないからです。

事実、憲法を無視してはばからないのが安倍政権です。平和をつくることを私達はイエスさまから、期待されています。だが、安倍政権は平和をつくる働きを阻害しています。この事態を見て見ぬふりをすることは、預言者エレミヤが言うように、平安がないのに、平安だ、平安だというのに等しいといえるのではないのでしょうか。